

入楞伽經の自証聖智

— 集一切法产品中心 —

神谷麻俊

入楞伽經の「集一切法品（七巻訳品名）」(sattirīṅśat-sahasra-savadharmā-sannuccaya-parivarta) における自証聖智 (pratyātmya-jñāna) の性格について考えてみたいと思う。自証聖智に関しては、管沼晃氏による綿密な研究論文があるが、私は自らの基礎研究として自証聖智の考察を試みたいと思う。

一、如来の特質である自証聖智 まず、本品に於て説かれる自証聖智を追つてみると、これは如来の特質であるとみることが出来る。例えば、菩薩が次第に如来地に往く様は次のように説かれる。

「三〔有〕は無始時より戯論である鹿雑な分別による熏習を因としていると觀察し、仏地は無影像 (nirabhāsa) であり、不生であると念することによつて自証聖法趣 (pratyātmyavadharmagati) に到り、自心は自在にして無功用行の領域に達し、衆色を摩尼珠のごとく〔觀察し〕、有情の心に入る微細な化身によつて唯心を覺せしめんがために次第地相續を建立する」と。また、「また大慧よ。法性仏は、心を自性とする特質を離れている自証聖智の活動領域を建立する」ともある。さらに如来乘現觀種性の特質として、また如来禪の特質として、自証聖智が説かれる。故に此の聖智は、修学の途上にある菩薩によつて、自心所現の分別に執着している凡夫等によつ

て修学されるべきものであると説かれる。その証拠に菩薩の修学のあり方をみると、「また大慧よ。菩薩は、心・識・慧を特質とする住所に住しおると、後に聖智の三つの特質の行をなす」とある。

三つの特質とは、①無影像相 (nirabhāsa-lakṣaṇa)、②一切諸仏願持相 (sarvabuddha-svapranidhānādhiṣṭhāna-lakṣaṇa)、③自証聖智所趣相 (pratyātmyajñāna-gati-lakṣaṇa) である。これら三つの特質を証得すると、跛驢のごとき以前の智慧を捨離し、第八地に到り、後の三つの特質の中で修学すると示されている。ところで、これら三つの特質は異質なものではなく、一体なるのを三方面よりその働きによつて区別しているにすぎないと考えられる。さて、そのうち自証聖智所趣相の説明をみると、「また大慧よ。自証聖智所趣相は、一切法の特質に執着しないが故に、如幻三昧身を得るが故に、仏地に往く道のりを歩むが故に、生起する」とある。ところで、一切法に対する執着の滅と自証聖智の証得とは表裏一体とみることが出来る。このことを示唆していると思われるのに、「一切性は、陽炎・夢・毛輪のごとく、無始より戯論の鹿雑な習気を因として」と觀察し、「菩薩は」自証聖智を求めるとある。また、「また大慧よ。心・意・意識より転依し、自心所現の所取・能取の分別を離れ、如来地である自証聖智を得ている修学者には、有無の想いは生起しない」ともある。かくして、如来・菩薩との関連のうちに、自証聖智の性格の一端を学びとることが出来るであろう。

二 涅槃等と自証聖智 一以外の関連の中で自証聖智が説かれるところを拾つてみると、

①また大慧よ。涅槃は自証聖智の活動領域であり、常断・有無の分別を離れている。

②また大慧よ。第一義聖智^{くわいじゆ}大空とは何か。いわく自証聖智^{じじゆ}の証得であり、一切の悪見の熏習は空^(śūnyā)である。故に第一義聖智大空と言われる。

③しかるに大慧よ。第一義は、自証聖智の活動領域であり、ことばによる分別の領域ではない。これより分別は第一義を生じない。

④大慧よ。そのうち円成自性とは何か。いわく相^(nimitta)・名称^(nāman)を依りどころとする特質たる分別を離れている真如たる聖智の活動する道のり。自性聖智の活動領域である。これが円成自性であり、如来藏の核心である。

⑤しかるに大慧よ。我が第一義常不思議性は、自証聖智の証得なる特質を因としているが故に、所作の有無を離れているが故に常である。外法の有無・常非常を推理しつつ常であるとするのではない。

とあつて、自証聖智は如来の特質のみに限らず、涅槃・空性・第一義・円成自性・常不思議性等と相応することが示されている。

三、妄法 (bhraṅti) と自証聖智 次に妄法は、常 (śaśvata)・

真実 (tattva) であると説くところがある。一般的には妄法は実法の反対語であり、世間において妄分別されるものを言う。したがつて虚偽なものである。しかし、ここでは、その虚偽な妄法が真実であると説かれてゐる。それはどういう訳か。説明によれば、聖人とつては、妄法中に転倒の知〔見〕も、非転倒の知〔見〕も、その他においても生起しなごとある。さらに、若し僅かの想いも生起すれば、それは聖智に基く相とはならず、凡夫の語るところであり、聖人の説ではないとも述べられてゐる。また、「それ(妄法)は、

有るのでもなく、無いのでもない。大慧よ。かの妄法は、聖人たちにとつては分別されることなく、心・意・意識の鹿羅な習氣を自性とする法より転〔依〕しているが故に、妄法は聖人にとつては真如 (tathata) であると語られる」とある。これらの説明を総合すると、妄法の存在は元來虚偽なものであり、虚偽なものは、いくら分別しても妄分別の外に出ない。故に妄分別は、絶対に真実とはならないのであるから、妄法は分別されてはならないのである。聖人は、この妄法に於て間髪の分別も起こさない。かくある聖人にとつて妄法が觀察されるときには、妄法は真実 (tattva)・真如 (tatha-^{ta}) になつてゐると解すべきであらう。そして、聖人をして、このような觀察を可能にしてゐるのは、心・意・意識の鹿羅な分別習氣を自性とする法より聖智の領域への依所の転換であり、自証聖智の活動領域に入つてゐるが故であるとみてよいであらう。一方、聖智を未だ証得していない者は、妄法の実際を知らず、分別戲論の領域に住して、そこより出ることができないのである。

以上、入楞伽經において説かれる自証聖智の意味の一端を述べてみました。

- 1 菅沼晃氏「入楞伽經における自内聖智の意義」、『宗教研究』第四十卷所収) 参照。2 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽經」p. 43, 117~118 同上 p. 57, 118~119 4 p. 64, 111~113 5 p. 97, 115~116 p. 98, 113 6 p. 49, 113~115 7 p. 49, 115~116 p. 50, 113 8 p. 50, 116~117 9 p. 82, 111~115 10 p. 92, 113~114 11 p. 99, 111~112 12 p. 75, 117~118 13 p. 87, 112~114 14 p. 67, 115~116 p. 68, 111 15 p. 61, 118~119 16 p. 106, 116 p. 107, 113 17 p. 108, 119~120